

揺れる台湾の文化遺産

世界遺産登録を目指すのか、目指さないのか

藤野 陽平 ふじの ようへい
北海道大学准教授

今まであまり注目されてこなかった台湾の世界遺産事情。政治に左右されてきた台湾の遺産登録について考える。



台湾に世界遺産はいくつあるか

突然だが台湾に世界遺産はいくつあるかご存じだろうか。比較対象として、他の東アジアの国々の数をあげておくと、日本は一九件、中国四八件、韓国二二件、北朝鮮二件となっている。こう見ると、台湾に複数の世界遺産があってもよさそうなものである。しかし実際には登録は一件もない。毎年、どこが世界遺産に登録されるかを各種メディアが熱く伝えてい

る。今日、話題となること多い世界遺産だが、お隣の台湾にひとつもないことはあまり知られていないのではないだろうか。このことは台湾に世界遺産に登録されるべき文化遺産がないということの意味しているのではない。そうではなく、中華民国・台湾がユネスコに加盟していないため、世界遺産条約に准していないことがその原因である。ただし、バチカン市国のようにユネスコ非加盟国でも登録されることもあるので、これ



「淡水紅毛城及び周辺の歴史建築群」の中心、紅毛城

だけで資格がないということにはならない。そのため台湾内でも世界遺産登録に向けた動きが見られる。

一八件の世界遺産潜在力点
台湾政府の文化部（文化庁に相当）は「台湾世界遺産潜在力点（以下、潜力点）」として、世界遺産登録に値する候補地を、一八件（文化遺産二〇件、自然遺産五件、複合遺産三件）あげている。代表的なものとして台北郊外の淡水に位置し、複数の植民地経験から多層的な文化的景観をほこる「淡水紅毛城」及び周辺の歴史建築群がある。その他にも、日本統治期に建設された大規模な灌漑施設である



台湾近代化をリードした宣教師が作った淡水教会

「烏山頭ダム及び嘉南大用水路」、国共内戦の激戦地「金門戦地文化」と「馬祖戦地文化」等もある。いずれも台湾の代表的な観光地なので、世界遺産候補地とは知らずとも台湾観光の際にこのなかの場所を訪れたという人も多いだろう。

のブームに過ぎなかったという訳ではなく、ときの政権の方針が大きく影響しているのである。というのも、台湾では二〇〇〇〜〇八年は中国ではなく台湾のアイデンティティを重視する民进党が政権の座にあった。この時代にはそれぞれ「中国」や「中華」という名前が付けられていたものを、「台湾」の名前に変更しようという「正名運動」が起き、中華民国ではなく台湾という名義で国連に加盟しようという動きが盛んだった。この時期に台湾からその独自の文化遺産を国際機関にアピールする行為が起きたのは至極自然なことだ

であった。一方二〇〇八〜一六年は台湾ではなく中国としてのアイデンティティを大切にする国民党政権の時代である。先の正名運動で台湾と名前を変えたものの多くが再び「中国」に名前を再変更し、国際機関へのアピールは下火となる。この時期は潜力点を否定はしないが推進もしないという消極的な態度をとる。今日、当地を訪れてもそこが世界遺産登録の候補地であることを示すものを見つけ出すのは難しい。



国共内戦の最前線だった馬祖島の独特な景観

異なることとなる。二〇一六年一月、正副総統、立法委員選挙で政権が国民党から民进党へと交代した。八年ぶりに世界遺産登録に積極的な民进党政権となったわけである。ユネスコに加盟していない台湾からの世界遺産登録に向けて今後の台湾政府は

政局とともに揺れる
台湾の文化遺産
こうした潜力点ではあるが、二〇〇〇年代になって急に盛り上がりを見せたのだが、二〇〇八年以降その熱は落ち着いている。これは単なる一過性



烏山頭ダム建設を指揮した八田與一の像

文化遺産に対する態度が変わることは少ないのではないかと。どのような政治的なスタンスであろうと、登録されれば多くの観光客が見込める世界遺産化に關して消極的な態度をとることはまずないだろう。しかし、それがこの台湾では政権の座にある政党によってその態度は大きく

どういった政策をとるのだろうか。文化遺産に関心のあるものとして目が離せない対象である。